

政府首脳はロシア国内での謀略工作に一縷^{いちる}の望みを託していた。

さて私はこうした歴史をふまえ、二つの線からソローキンの真相に迫ることになった。一つは歴史家カザノフの線である。かれは先日の手紙で、ソローキンに関し新たな事実が見つかったので郵送したいと連絡してきた。

もう一つは、松山収容所の高野殉庵所長の日記である。この夏に、『露国俘虜』編纂責任者の松山時代の日記を、私は高野の郷里の岐阜県神戸町から入手することができた。

日記には驚くべきことが書かれている。しかし九十年の歳月が流れ去ったいま、記述を裏付ける物的な証拠が乏しく、いま私は収容所にゆかりのあった各所を訪ね、「殉庵日記」の裏付けをしている最中である。読者の皆さんからの情報もいただきたい。

「危ないから、気をつけてくださいよ」

祥宗寺の本堂から庫裏へ通じる急な階段を素足で下りながら、住職が倉沢の足元を気にした。黒光りする階段や廊下は、積み重ねた年月の厚みを感じさせる。

「ここですよ」

住職はがらっと引き戸をひいた。北側は格子窓をとった六畳ほどの板間である。入り口のスイッチを上げると、天井から吊された裸電球に灯がともった。

まっすぐ奥へ進み、板戸をひく。上下二段の布団入れらしき空間がぽっかりこちらを向いた。

「上ですか」

と思わず住職の横から倉沢は中を覗き込んだ。

「いや、下です。下の右」

住職は膝を折ると、下の右側の土壁に懐中電灯の光りをあてた。

作家は四つんばいになり、中へ上半身を入れた。

鶯^{うぐいす}色にくすんだ壁面に、鉛筆で描いた女の横顔が浮かんでいた。

想像したより、ずっとあっさりしたデッサンである。

大きく意志的な眼と、高い鼻にひきしまった口元。

一見し、作家は古代エジプトの王家の墓の壁面に描かれた女の顔に似ていると思った。

「何年も前に見つけ取りましたが、今朝、倉沢さんが



挿絵 (M. Horibe)

新聞に書かれたものを読んでるうちに、不意に思い出しましてな」

住職は言い訳のようなことを口にした。

「たしかに子供のいたずらではない」

「すると、やはりロシア将校のもんでしょうな」

住職は首を壁の方へつきだす。

「ちょっと、ここ、照らしてください」

懐中電灯の丸い光が横顔の頭部に集まる。頭髪は粗く太い線が編目模様書きこまれている。

作家は絵を凝視し、押し黙った。

写真に撮ってあるというので、作家は座敷で見せてもらった。

四つ切りの大きさに拡大し、額に入っていた。

「ロシアで帰国を待ってる新妻か恋人なんでしょうな」

「まあ、そんなところでしょう」

「この将校さん、無事に帰るとればええが」

「そう、願いたいもんです」

倉沢は借り受けた写真を風呂敷に包み庫裏を出た。

もう一箇所、行き先がある。参道に着流しの影を落としながら山門へ急ぐ。境内の南の墓地からおだやかな海の色をした香煙がたちのぼっていた。

倉沢は表通りでタクシーを拾った。

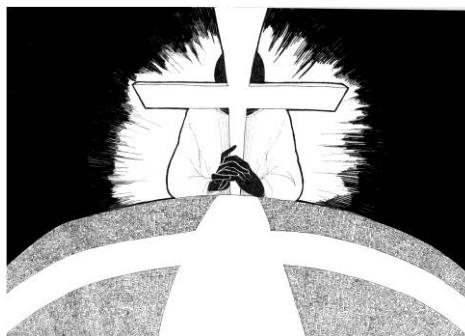
街の外れにある老人ホームの名を告げる。ちらっとふりかえった運転手が何を勘違いしたのか、あそこは景色がええですなという。面会だと短く応えて、倉沢は車窓に眼を転じた。

三十分後、かれはホテルのような造りの老人ホームに着いた。面会の相手は、昭和三十五年の冬にロシア人墓地が現在の場所に移転した際に現場監督だったという元石工である。かれも新聞を読み、墓地移転のことで参考になればと情報をくれたのである。

「露人墓地は、もともと人焼き場の後の山にありましてな」

と老人はいまはゴルフで日焼けしたという四角い顔をしかめて、次のように話した。

人焼き場の背後の山では土砂の採掘をしていた。山頂にあった墓地はこの採掘でじわじわ崩れだした。そこでそれまで墓地を管理していた四国財務局が松山市へ墓地の委譲と管理を申し出たのである。市は墓地が崩れ始めた責任を取らされるかたちでこの申し出を受け入れ、ソ連大使館の了解を得た後、移転作



挿絵 (T.Hoshi)

業を開始した。老人はこの時の現場の責任者である。

「墓地が崩れたとき、人焼き場の方へ転がり落ちた墓石はなかったですか」
と作家は核心に迫る質問をした。

元現場監督もそのことが妙に気になり始め、それで倉沢へ電話をしたのだった。

ソローキンの墓石があった可能性がある。もしそうであれば作家がいま推理し、物的に証明しようとしている重大な事実の足元をすくわれることになりそうであった。

「たぶん、なかったと思います」

「たしか、ですか」

「ええ、ただ……」

元石工は言いよどんだ。

「何か」

「墓石の数が移転の前後でちがったということはないが、墓石の並べ方はでたらめになった」

「なぜ」

「だれも関心がなかったんよ。でたらめだと気づいとったが、とにかくあった数だけはきちっと移したらええという仕事やった。露人墓地などと口にするだけで、人目をはばかりような時代やったからの」

二人のいる二階の応接ロビーから、近代的なビルが建ち並ぶ松山市内が一望できる。老人は当時のことを思い出すのか、窓に視線を移した。

「前の墓にあったものはどうしました？」

と作家は尋ねた。

すると、老人の横顔に微笑が浮かんだ。

「何もありません。衣服はもとより、一片の骨もなかった」

「そうですか」

「ええ、六十年というのはいがいそんなもんです」

と老人は墓をあばくまでの時の永さを表現した。

この日の夕刻、神田雅子から電話があった。

彼女は反響が知りたい、と倉沢が新聞に発表した特集記事のことを遠慮がちに尋ねるのだった。それでかれは祥宗寺と老人ホームへ行ってきたことを手短かに話した。他に三件、情報が寄せられたが、いずれもたいしたことではない。沈黙の後、自分にできることがあるのなら協力したいと雅子はいった。倉沢には願ってもないことである。

「あなたに、お見せしたいものがある」

かれは机の上に置いた祥宗寺の壁絵の写真を見つめた。